

令和4年度 やまなみ幼稚園自己評価・関係者評価結果

学校法人 誠昭学園

幼保連携型認定こども園 やまなみ幼稚園

1 やまなみ幼稚園の教育目標

- * 健康な身体をつくり体力の向上をはかる。
- * 幼児期は社会的な人格形成の基礎となるので、基本的な生活習慣を身に付け、将来、社会生活、団体生活に慣れていく習慣を身に付ける。
- * 創造性を豊かにし、明るく朗らかな子どもに育てる。
- * 個性を尊重し、たくましい子どもに育てる。
- * 友達と仲良くし、おもいやりのある子どもに育てる。
- * 遊びを通じて、思考活動を活発にし、考える子どもに育てる。
- * 英語教育を通じて国際的な感覚を持つ子どもに育てる。

2 本年度に定めた重点的に取り組む学校評価の具体的な目標

- * 子育て支援の一体化
- * 発達支援体制の強化
- * 人材育成
- * 教育・保育の内容整備及び充実

3 評価項目の達成及び取り組み状況

評価項目	評価結果
子育て支援のさらなる充実	<p>今年度もコロナ禍において、十分な子育て支援を実施することは困難であった。しかし、少しずつコロナ禍以前の状態に戻せるように、できる範囲で、子育て支援を実施した。コロナ禍において地域に向けた子育て支援を実施しているところは限られており、ニーズは高かった。同様に、在園児保護者への支援についても、ニーズは高いと思われる。引き続き、コロナ禍において、できることを考え、少しずつ元の状態に近づけていけるように子育て支援に取り組んでいきたい。</p> <p>市からの要請に応え、2・3号児の定員を増やした。これにより当園の2・3号児の定員は30名から40名へと変更された。</p>
発達支援体制の強化	<p>社会性発達等のチェックリストを保育者支援、子ども支援の一環として活用した。その結果、子どもの変化だけでなく、保育者の変化を確認することができ、保育者の質の向上に寄与する取り組みとなった。</p>

	その成果を日本保育学会での研究発表と常磐会短期大学研究紀要に論文としてまとめ発表した。まとめるにあたって、現状での課題や限界も浮き彫りとなった。今後は、アセスメントの強化を図り、園組織として子どもの支援のみならず保育者の支援につながることを考えていきたい。また、児童発達支援に通う在園児には、園と児童発達支援とが連携できるように、支援目標の共有や具体的な支援方法の共有を行っていきたい。
人材育成	保育の質の充実と保育者との負担とは相関関係にあると思われる。教職員の負担を減らし、いかに保育の質をあげるのかということを考えると、保育者としての質を上げていくことが必要であると考えられる。そのためには、伝達型の園内研修によって、知識の共有と園の方針の理解に努めたい。そのような基本的な教職員の理解をもとに、教職員が育つような協働型の園内研修を並行して行っていきたい。今年度においては、そのような芽生えとなるような取り組みを行ってきた。具体的には鳴門教育大学の予防教育プログラムを園内研修に導入し、教職員の心の持ちように対しても支援できるように体制を整えた。
財務運営の状況	監事監査、公認会計士監査を受けており、当園の財務は適正であり、園運営においても適正に運営されていると認められた。

4 学校評価の具体的な目標や計画の総合的な評価結果

結 果	理 由
概ね達成できた	<p>コロナ禍において、状況を鑑みながら子育て支援を少しずつ実行していった。具体的には地域との連携において、人数制限等を行ったうえで、年長児との交流会を実施することができた。3年間の間に教職員の意識や園のシステムも変化した。今後は、できる範囲でコロナ禍以前の状態に少しずつ戻していくとともに、教職員の意識等もコロナ禍以前の状態に近づけていけるように保育実践を進めていきたい。</p> <p>人材育成は、当園のみならずすべての幼児施設において重要な課題となってきている。人手不足から、優秀な人材がそろいにくくなり、教職員の意識にも変化が起きてきている。そのような中で、どのようにすれば教職員の意識に働きかけられるのかを思考錯誤してきた。その結果、協働型において、各人が考え、よりよい保育の実現を目指すためには、伝達型の研修により保育者としての基本的な学び直しが必要であると考えようになった。来年度は、このような基本からの学び直しを行い、コロナ禍からの正常化に向けて</p>

	教職員が一丸となっていけるように、教職員の意識に働きかけるようにしていきたい。
--	---

5 今後の取組むべき課題

課 題	具 体 的 な 取 組 み 状 況
子育て支援の拡大	2・3号児の入園が増えてきている。この現状を踏まえ、市や保護者からの要請に応えながら、できる範囲での対応を行っていきたい。同時に1号児の対応にも柔軟な対応を取っていきたい。特に幼児教育の無償化が始まり、満3歳児の入園が増加傾向にある。一方で、専業主婦世帯が減少し、共働き世代が増加している。このような現況を踏まえ、満3歳児の世帯については、適切な対応を取っていきたい。また、コロナ禍において、子育て支援の必要性を痛感した。1歳児についても、あそび場の提供や親子登園など、活動の機会をできるだけ整えていきたい。
発達支援体制の強化	児童発達支援と園との連携が行えるように模索してきたが、現状としては、十分であるとは言えない。同法人での設立である利点を生かして、両者の連携を充実させていきたい。
人材育成	今年度と同様に、園内研修の充実を図りたい。特に継続して、実技指導を大学教員より定期的に受けられるような環境を整えて、園内研修が保育実践に直結するようなものも引き続き検討していきたい。 同時に、伝達型と協働型の園内研修のメリットとデメリットを意識して、当園に合わせた園内研修の体制を整えていきたい。
保育内容の見直し	中央教育審議会で議論されている、体験重視プログラムを受けて、保育内容について、見直しを図りたい。特に、年長児については、小学校への接続を意識した教育・保育課程を編成していきたい。

6 学校関係者評価(学校関係者評価委員の評価項目にそった意見を集約)

評 価 項 目	関 係 者 評 価
人材育成 園内体制	<p>子どもの支援を通して、保育者も育っていくと思われるため、人材育成と発達支援とを評価項目として取り上げるのはとても良いことである。園内研修でも同様に、発達支援の内容を取り上げ、さらなる充実を図ってほしい。</p> <p>人材育成では、若い世代に対応した研修内容や方法を取り入れていく必要がある。どの業種でもこれが非常に難しく頭を悩ませている問題の一つであると思われる。試行錯誤しながら、取り組んでいってほしい。また、その際に研修で教職員が一丸となり学びを深めていくためにも、研修外でも懇親会などを通じて関係性の深まりが見られるように取り組んでいってほしい。</p> <p>園行事も徐々にコロナ禍での体制に慣れてきた感があるが、コロナが収束した時にコロナ以前の状態に戻していけるように、体制の変化が必要であると思われる。同時に教職員の意識も体制の変化に追いついていけるよ</p>

	<p>うに、徐々に対応をしていってほしい。</p> <p>在園児保護者についても参観等を徐々に行い、コロナ禍において、安全性を担保して行うことは難しいが、保護者の保育を見たいという思いにできるだけ対応をしていってほしい。</p>
--	--